

「理科ばなれ」の流れのなかで ——民博のよき伝統を残そう

山本 紀夫 (やまもと のりお)
民族文化研究部

近

年、日本の子どもたちの「理科ばなれ」や「科学ばなれ」が心配されている。たしかに、わたしが高校や大学時代に愛読していた科学や自然に関する雑誌はあいついで姿を消し、青少年向けの科学雑誌は現在ほとんどなくなっている。また、わたしの子どものころにくらべると、昆虫少年や植物少年もめっきりへったようである。

しかし、「理科ばなれ」や「科学ばなれ」は子どもの世界だけのことなのであろうか。たとえば、民博でも「理科ばなれ」がすすんでいるのではないだろうか。その例をあげてみよう。かつて民博の研究部スタッフのなかには動物学や植物学、薬学、農学などの生物学系の出身者がわ



ヒマラヤにて。植物生態学者の土屋和三隆大学助教授との共同調査



アンデスにて。遺伝学者の川本芳京都大学助教授との共同調査。家畜化の起源を探るためにビクーニャ(野生のラクダ科動物)の血液を採取しているところ

たしをふくめて何人もいたが、今ではほとんどいなくなつた。それを反映してか、民博研究部の一角を占めていた実験室も縮小されたり、姿を消したものとさえある。

い

つほう、研究の世界では自然科学と人文科学との統合、いわゆる「文理融合」の必要性が叫ばれている。最近の研究

は分野を問わず、どんどん専門化、細分化しており、このような動向に対して反省の声が聞こえてきたからである。その後、さまざまな研究分野で総合化の重要性が認識された結果、民博が基盤機関のひとつになつて総合研究大学院大学(総研大)も生まれた。総研大は、既存の学問分野の枠を超えた学際領域の

研究の発展をめざして設立されたのである。このような動向を先取りしていたのが創設時の民博ではなかったか。先述した生物学系の民族学者たちが学際的・総合的な視点で研究を推進していたからである。このような視点を反映して、かれらが実施したシンポジウムや共同研究、さらには出版物は、民族学(文化人類学)だけを専門とする研究者たちとは、ひと味もふた味も違うものであった。そして、学際的・総合的な研究こそが民博の大きな特色のひとつであったはずである。その特色がいまや消え去ろうとしているのである。

そんな流れのなかで、わたしはなんとか民博の特色をまもりたいと考え、実践してきたつもりである。ネパール・ヒマラヤで植物学や畜産学などの自然科学者たちとチームを組んで三年間調査をしたのもその例である。また、今春まで四年間にわたってアンデスで実施した調査でも自然地理学者や遺伝学者とともにフィールドワークをおこなった。もちろん、これらの自然科学系の研究者と民族学者のあいだには調査方法などで大きな違いがあり、とまどうことも少なくなかったが、それ以上に得るところが大きく、学際的な視野も大きく広がった。

昨年、民博は創設されて三〇周年をむかえた。現在、創設時代のことを知る研究者は少なくなり、さまざまな民博の伝統が失われようとしている。そのなかで、わたしは「文理融合」の民博の伝統の火だけは消したくないとがんばっている。もし、その火が消えれば、研究の面での民博らしさまでも失われてしまうのだから。